神崎町長賞

陰から支える「ヒーロー」

神崎町立神崎中学校三年　飯田　大翔

税金はなぜあるのか。税金は本当に必要なのか。

僕は陸上部に属していて、長距離種目をしている。長い距離を走っているとよくけがをする。その度に病院に行き、治療を受けたり、薬をもらったりする。僕は一度病院の領収書を見たことがある。領収書の合計の欄には、「四千六百円」と記されていた。僕はそのとき週に一回病院に通っていた。母は毎週僕のために約五千円払っていたのだ。僕は非常に申し訳なく思った。

その日の夜、僕は母にお礼を言った。毎週五千円も病院代を払ってくれてありがとう、と。すると母は、「そのことなら気にしなくて全然大丈夫よ。二百円しか払ってないから。」と言った。僕は、「なんで四千六百円じゃないの？」と思った。母の言っていることを理解することができなかった。母は続けた。「神崎町に住んでいると、病院代が二百円で済むのよ。」僕はその言葉を聞き、驚愕した。「四千四百円もお得なんだ。」また、僕はふとこのような疑問を持った。なぜ神崎町はそのような政策をするのか。僕は調べてみることにした。まず母が言っていたものは、神崎町の「子ども医療費助成事業」というものだった。その内容は、神崎町に住んでいる中学三年生までの子どもの医療費における自己負担額が通院一回二百円、入院一日二百円、薬代は０円になるというものだ。この政策の目的は、「子どものいる世帯の暮らしを少しでも助けるため。」と神崎町のホームページに記載されていた。僕は思った。もし病院代が百万円かかってしまったら神崎町はとても多くの金額を負担することになる。そのようなお金はどこから出ているのか。僕はさらに調べた。すると、神崎町の衛生費というところから出ていることがわかった。衛生費はどこから出ているのか。それは神崎町の税収からだった。つまり、僕たちが普段納めている税金のおかげで医療費が格安になっているのだ。僕はこれを知ったとき、初めて税金というもののありがたみに気がついた。僕は税金について興味を持ち、他にどのようなことに使われているのか調べた。お年寄りの老後を支える年金、僕たちが速く、快適に移動するために必要な道路の建設や整備、街の安全を守ってくれている警察官や消防士への給料、他にも僕たちの生活を支えるための様々なことに使われていることがわかった。

僕はこれまで税金なんて国民にほとんど還元されていないと思っていた。もし、税金は本当に必要か、と問われたらこれまでの僕ならいらないと答えただろう。しかし、今はそうは思わない。税金は必要だ。僕は今、税金がないと生きていけない自信がある。税金は僕たちの生活を**陰から支える「ヒーロー」**なのだ。僕は税金を納める場面があったら嫌々納めるのではなく快く納めようと思う。「ヒーロー」を支えるために。